

■ 公民館主事

人口約1万人、中山間地域にしては平地面積も多い西予市野村町。戦後の間もない頃には、養蚕や酪農で栄え、「ミルクとシルクの町」を自称してきましたが、酪農は四国一の規模を維持しているものの、養蚕の生産量は減少。きゅうりの特定生産地指定を受け、大規模生産農家が町の農業を牽引しています。

こうしたなか、高齢農業者が増え始めた1990年頃、町は、「まちおこし」として、公民館活動に部会を組織し、「なんとか地区に活気を」と話し合いを持ち、私も公民館主事として参加しました。「地域経済が良くなる事が必要。村おこしといえは文化活動もあるが、長続きさせるためには、投資が少なくリスクも少ない



特集5

新鮮、安全、おいしい、懐かしい 人気の産直商品

百姓百品株式会社 代表取締役
和気 数男
(西予市)



百姓百品の売り場風景

事業はないものか」と思案しました。朝市が人気を呼んでいたこともあり、「これ何とか町全体に広げよう」というところから動き出しました。「余っている野菜を出しませんか」と町内各地区に呼びかけ、チラシも配布しました。1992年、ほんどが60歳以上の高齢者160名(現在は約430名)で朝市(当初は農協の駐車場、現在は乙亥の里)を『百姓百品産直組合』として始めました。町内には非農家も多いので、人気を呼び、早朝からお客さんが我先にと殺到するようになりました。

■ 松山への出店

「町内だけでは需要も限られているし、都市との交流もできない」と考え、まずは県内最大の消費人口を抱える松山で月2

回の定期朝市を開催。その後1998年に東本町に常設店舗を設置しました。常設の産直ショップは、松山市内の消費者に人気を呼び、「付近の人の流れが変わる」ほど活況を呈しましたが、店舗といっても屋根がある程度で雨風をしのげず、駐車場もありませんでした。02年3月、旧店舗から500mほど離れた、えひめ生協の東本店内に移設。4年間の顧客は、新店舗に移つてからも熱心に来てもらい、さらに余戸店と三津店にも出店することができました。

■ やめられない理由

当初は、農家に呼びかけて野菜を出荷してもらっても売れず、「産直」の仕組み、農産物の商品化を農家に学んでもらうこ

とから始めました。やること全てが新しいことで、消費者の需要に応えられる安定出荷のための生産体制確立や、流通経費を始めとする運営経費の削減、事務局体制の確立等に役員挙げて取り組んできました。

そんな時に惣川地区の76歳のおばあちゃんから一本の電話があり、「松山の息子が出て来いと言っている。私は惣川で生活したい。年金と月3〜5万円の産直の収入があれば、やっていける。軌道に乗るまで、どうか続けてください」との電話でした。また、別の農家の方からは、「生きがいがあった」「荒れた畑が回復した」「土方ができなくなつて、後は死ぬだけと思つていたが、これで食べられる」など、多くの励ましの声をいただきました。「地域で農業を続けることが地域の維持に繋がる。規模が小さくても農家がいる限り、続けていかなければならない。農家に喜んでもらつている限りは、なくしてはいけない」と決意を新たに頑張りました。

「百姓百品」のモットーは、「やりたい人は誰でもどうぞ」「出荷物には最初から最後まで生産者が責任を持つ」。登録に制限もなく、どんな商品



百姓百品の売り場風景

をどれくらい、いくらで売るかということも本人まかせ。そのかわり、出荷物について本人がきちんと責任を持つ。「それが自主組合のよさ。何もかも組織が管理したり、生産者も組織におんぶに抱っこでは農協とかわからない」。だから、出荷量も売上もマチマチで、少ない人は月4千円、多い人は月60万円以上。野菜づくりは得意でも直接消費者と接したことがない人がほとんどなので、窓口の販売専従者が消費者ニーズを農家に伝えたり、逆に農家の立場で接客し、料理法などを教えたりもして、生産者と消費者が接する機会を多く設けています。松山にも店を出したことで、地域のおじいちゃんもおばあちゃんも、やる気十分です。

■これから

販売面での最大の課題は、需要に応えられる生産体制の確立。さらに栽培技術を磨いて、「さすが百姓百品！」と言われ

る『いい物』を作りたい。自己主張（自己宣伝・ポップ・包装と自己責任（ポジティブリスト制度の遵守・すべて自分で責任を持つ）を自覚して、包装や品揃えを工夫し消費者に買ってもらえる『物づく』を進めたい。

生産面では、昨年、農業生産法人「百姓百品村」を設立し、新任の20代の女性を含む3名の職員と専従役員1名体制で主としてネギ・人参の生産を開始。さらに若い人を増やして地域農業の振興をしたい。

もう一つは、中山間地域の生産現場を消費者（国民）にもつと知ってほしいとの願いから、えひめ生協の組合員さんには、年5〜6回田んぼ仕事を体験してもらい、また、月1回は松山市内で田舎料理教室も開いています。田舎の「素晴らしさ」をなくさないためにも、農家だけが中山間地域を守るのではなく、消費者・国民全で一緒に守ってほしい。